

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 大野斉子

大野斉子氏の論文「N.V. ゴーゴリの異本論—1840年代から1910年代におけるゴーゴリ作品の受容の分析」は、19世紀半ばから20世紀初頭のロシアにおけるゴーゴリ作品の受容を考察し、合わせて文学テキストが普及し、定着していくプロセスを明らかにしようとしたものである。

ニコライ・ゴーゴリ(1809-1852)の作品は生存中から20世紀に至るまで、本来の文字テキストだけでなく、版画集、教育・娯楽目的の簡易化された読み物、演劇、映画等、様々な形態で出版されてきた。大野氏の論文はこれらの出版物を広義の「異本」と捉え、「異本」の存在はゴーゴリ作品がロシア社会に普及するに際して大きく貢献したと、指摘する。

本論文は序、結論と本論三部から構成されている。まず本論第一部では、1840年代に『ゴーゴリの作品『死せる魂』からの100枚の絵』がどのような経緯で制作され、受容されたかが明らかにされている。当時のロシア木口木版の最新技術が生み出した傑作『100枚の絵』はこの作品をロシア社会に送り出した知識層の文化と密接な関係を有しており、その発展及び衰退と運命をともにしたのであった。第二部では1860年代ロシアのゴーゴリ作品の出版状況が考察されている。大きな変化は、①もとの文字テキストからの独立性の高いイラストが制作されたこと、②ゴーゴリ作品を教育的な視点から積極的に読み替えようとする試みが目立ったこと、であった。特に教育改革実施下で、ゴーゴリ作品の読み替えは読者開拓を目指した諸メディアと結びつき、「ゴーゴリ本」の増加をもたらした。大野氏はこうした1860年代ロシア出版界の動向を雑誌『ニーヴァ』と「移動展覽派」を具体例に分析してみせる。第三部では1870年代から20世紀初頭までにゴーゴリ関連メディアの種類と量が増加し、膨大な数の異本が出現したことが取り上げられる。この現象が集团的創作のメカニズム、メディアの発達、コミュニケーションの役割の三点から分析され、同時代の文化の枠組みでは捉えきれなかったゴーゴリの「異本」の意味が明らかにされていく。

本論文はゴーゴリの文学をロシア近代文学の古典としてア・プリオリに認めるのではなく、彼の作品がどのようにしてロシア社会に普及し、読者に古典として認知されるに至ったかを明らかにしようとした極めて意欲的な仕事である。また、普及のプロセスを「異本」の役割を手掛かりに解明しようとした点も斬新で評価できるであろう。

審査の過程では、<読者の嗜好の変化やメディアによる読み替え行為をゴーゴリ作品の内容との関連の中で明らかにする作業も必要ではないか>との意見が出された。しかしこの指摘は本論文の本質的な欠点を意味するものではなく、むしろ大野氏の研究に対する期待の大きさを示すものであったと言える。以上のような評価に基づき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位に充分値するものであるとの結論に至った。